



TOKUMA NOVELS

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

半村 良

都市の仮面

Ryō Hamamura © 1978

カバー装幀 若菜 東十矢島高光

本文挿絵 藤本 蒼

落丁・乱丁はおとりかえいたします

ファンタジック・ロマネスク

都市の仮面 半村 良



徳間書店

TOKUMA NOVELS

— 目 次 —

都市の仮面 — 7

静かなる市民 — 63

村 人 — 91

生命取立人 — 121

旧約以前 — 149

おまへたちの終末 — 179

都市の仮面

地下道

狭い階段を降りきると、いくら幅の広い、薄汚れた通路へ出る。その地下の道路は心持ち下り勾配で、進んで行くと更に幅の広い地下道へ出る。

そこが新宿駅西口から四谷方向へ伸びた長大な地下道の突き当たりで、目の前に地下鉄新宿三丁目駅の改札口があり、右手は伊勢丹デパートの入口になっている。地下道を歩いて来た男女の大部分がその入口へ吸いこまれて行く。

駒井啓介は伊勢丹の入口の前を通りすぎながら、ちらりと腕時計を見た。

十一時二十七分であった。時間が早いので、デパートへの客は、中年の女たちと学生風の若い男女ばかりだった。

「昼飯、すませて帰りましょうか」

駒井は並んで歩いている野村にそう言った。

野村は緑事務機販売の先輩で、この春係長に昇進したばかりである。

「うん……」

野村は生返事をした。駒井は機嫌を窺うような眸で、ちらりと相手の横顔を見た。

二人とも営業部員で、野村が係長になって以来、駒井はいつも彼と行動するようにきめられている。つまり、野村係長の部下というわけである。ただし、野村の部下は今のところ駒井だけであった。

「ここを歩いたほうが早いですよ」

駒井が言い、野村がまた生返事をする。

朝一番で池袋の得意先へ行った帰りなのである。

緑事務機販売の前身は文房具の会社で、今でも得意先に対する文具消耗品類の供給部門が残っている。

二人はこの数週間、池袋にある古い得意先へ、最新

型の湿式複写機を売り込もうと苦心していた。今日がその結論の出る日で、氣負いこんで訪問したのだが、はっきり断わられこそしなかったものの、体よく購入延期を申し渡されたのだった。

中っ腹の野村が、先方の門を出るやいなや、通りがかったタクシーに手をあげ、神宮通りを新宿へ向かったのだが、ひどい渋滞ぶりで動かばこそ……車の中で野村の不機嫌さはつのる一方だった。

やつとの思いで新宿三光町あたりまでたどりついたが、そこから西口までが更にひどい混みようで、駒井が運転手の要求をいれて降りてしまったというわけなのだ。

「なあ駒井」

地下道を歩きはじめてしばらくすると、野村はぼんやりとした表情で前をみつめながら言った。

「何ですか」

「これからお前、どうするんだい」

「え……」

駒井は咄嗟に社内的情勢を思い泛^{うか}べながら、野村の顔をみつめた。

「売り込み先は、まだ係長のノートにたくさん書いてあるじゃないですか」

入社してまだ一年と何か月かの駒井には、内部のくわしいことは判らなかったが、今朝の結果がよくなかったにせよ、そうさし迫って締めつけをくわされる状態ではないはずであった。

「莫迦^{ばか}……」

野村は苦笑し、軽く駒井の肩を叩いた。

「そんなことじゃない」

不機嫌さが消えていた。駒井はほっとしたように尋ねる。

「何のことです」

「人生さ」

「人生……」

「ああそらだよ。お前はまだいいよ、若いからな。」

俺なんか、あと二年で三十だぜ。嫌だよなあ、三十三ってのは」

駒井は二十六。野村は二十八。ふたつしか違わないが、野村はいつもひどく年上のようなことを言う。高校、大学と陸上競技の選手だったせいかもしれない。先輩、後輩の關係のやかましい生活の癖を、サラリーマンになっても持ち越しているのだろう。

「人生なんて、三十になったら考えますね」

駒井はからかい気味に言った。駒井は読書好きで、そういうことになる、野村よりずっと陰影に富んでいる。

「若いんだなあ」

野村が嘆息し、駒井は通りがかった若い女を振り返るふりをして、失笑をおし殺した。

「係長らしくもない、弱気ですね」

「俺だって、たまにはくたびれるさ。でもな、今の

タクシーの中でずっと考えてたんだ。嫌な予感がするよ。つまんねえ人生なんじゃねえかなあ……」

野村は自分の未来を遠望しようとするように、長い地下道の先を眺めている。

「予想なんて当たるもんですか。ねえ係長、いいほうの予想をして、当たったことあるんですか」

「ん……」

野村は意外そうな表情で駒井をみつめる。

「ないでしょう」

駒井が押しつけるように言った。

「うん。ない」

「ほら、そうでしょう。人生なんて、そんなもんですよ。肝心なときにはいつも予想が外れるんです。」

いいほうにも、悪いほうにもね」

「先週の3・4みたいにか」

野村は先週買った馬券のことを思い出したらしく、そう言って笑った。

「うん、そうだな。俺は腹が減ってるらしい。昔っから、腹が減ってる調子が悪いんだ」

野村は両肘を張り、肩を二、三度まわしながら言った。いつもの大ざっぱな表情に戻っていて、人生論をはじめようとしたにしては、拍子抜けするほど、あっけらかんとしていた。

あのタクシーの中で、この男はいったい何を考えていたのだろう……駒井はふとそう思った。

追い抜くもならず、空いた道へ逃げるもならず、湧きあがるいらだちをじっと抑えつけながら、ひたすら動きだす順番を待っている姿を、自分の人生に重ね合わせてみたに違いなかった。

なるほど、と駒井は思った。

そういう野村を、駒井はいずれ近い内に追い越してみせるつもりであった。駒井は、それまで単なる社内の先輩にすぎなかった野村が係長に昇進すると、その翌日から、係長、係長と呼びはじめた。

てのひらを返すようなその態度が、決して見よいものでないことは、充分に承知していた。しかし、大学の運動部員がそのままサラリーマンになったような野村には、翌日から係長と呼んでやるのが、いちばん効果的な接し方であると考えている。

そのまま一生野村の部下では仕様がなないが、彼を追いつくことで、その浅薄な態度も帳消しになる。追い越したあとでも、以前の先輩、上司としての態度を保ちつづければ、ことによっては美德にもなりかねない。世間とはそういうもので、何事も長い目でみなければ判りはないのだと思うのであった。

野村を追いつくのはわけのないことだ……半歩遅れて、相手のたくましい肩を眺めながらそう思った。だが、それはゲームにすぎないようであった。そのさきに、古参の係長が五人いて、課長代理がいて部長がいて……。全部を追いつくにはかなりの時間が必要。仮りに全部追いついて先頭に出てみたとして、

いったいその先は……緑事務機販売は、所詮もと文房具商の、ちっぽけな会社にすぎない。

「どうした」

野村が言った。

「急にしおれたな。お前も腹が減ったろう」

二人とも独身で、朝食はめったにとらない習慣だった。

……お前と一緒にしてくれるな。駒井はそう言いたかった。

「ええ。西口へ行ってから、どこかへ入りましょう」

オフィスのあるあたりでは、安くて量のある昼食にありつくのがひと仕事だった。どの店も、正午をまわったとたん超満員になる。

「おい……」

野村が立ちどまってふり返った。地下道の幅がいっそう広くなり、人通りが少し減ったあたりだった。両側がデパートのショーウィンドーになっていて、

足の下は地下鉄新宿駅のプラットホームのはずだった。

「なんだよ」

立ちどまっている駒井のところへ、三步ほどひきかえして来て、野村が言う。

「またいますよ」

「何がだ」

「あれ……」

駒井は顎^{あご}をしゃくつてみせた。

「なんだ、酔っ払いか」

珍しくもない、といった風に、野村は歩きはじめた。駒井もそれについて歩きだしながら、

「どういふんですかねえ」

と言った。

「酔っ払いかルンペンさ」

「ああいう連中が増えましたねえ」

「何をして食ってるんだらうな。昼間っから地下道

で寝てるなんて」

「よく見かけるけど、どうも酔っ払いじゃないようですよ」

「ルンペンか。それにしてもいいご身分だ。天下泰平だよ」

「係長があんなこと言うから、あそこで寝てる奴が急に気になったんですよ」

「何か凄く強い酒でも呑んでるんじゃないのかな」
「シンナーやボンドでラリる年頃でもないですしね」

駒井が言うと、野村は腕時計を眺めてから、ショーウィンドーの前で肘枕ひじまくらをして寝ている男をふり返った。

「いつも見慣れているから、気にならなくなっているが、そう言われるとたしかに変な連中だな。ルンペンにしては身なりがいいし」

「新宿にも、まっ黒に汚れたのがいますけど、そう

いうのとも少し違うみたいだし」

「ゆうべ酔っ払ったまんまなのかな」

「いや、違うでしょう。午後の三時四時に寝てるのを見たことがありますからね」

「お前は変なことに注意深いんだな」

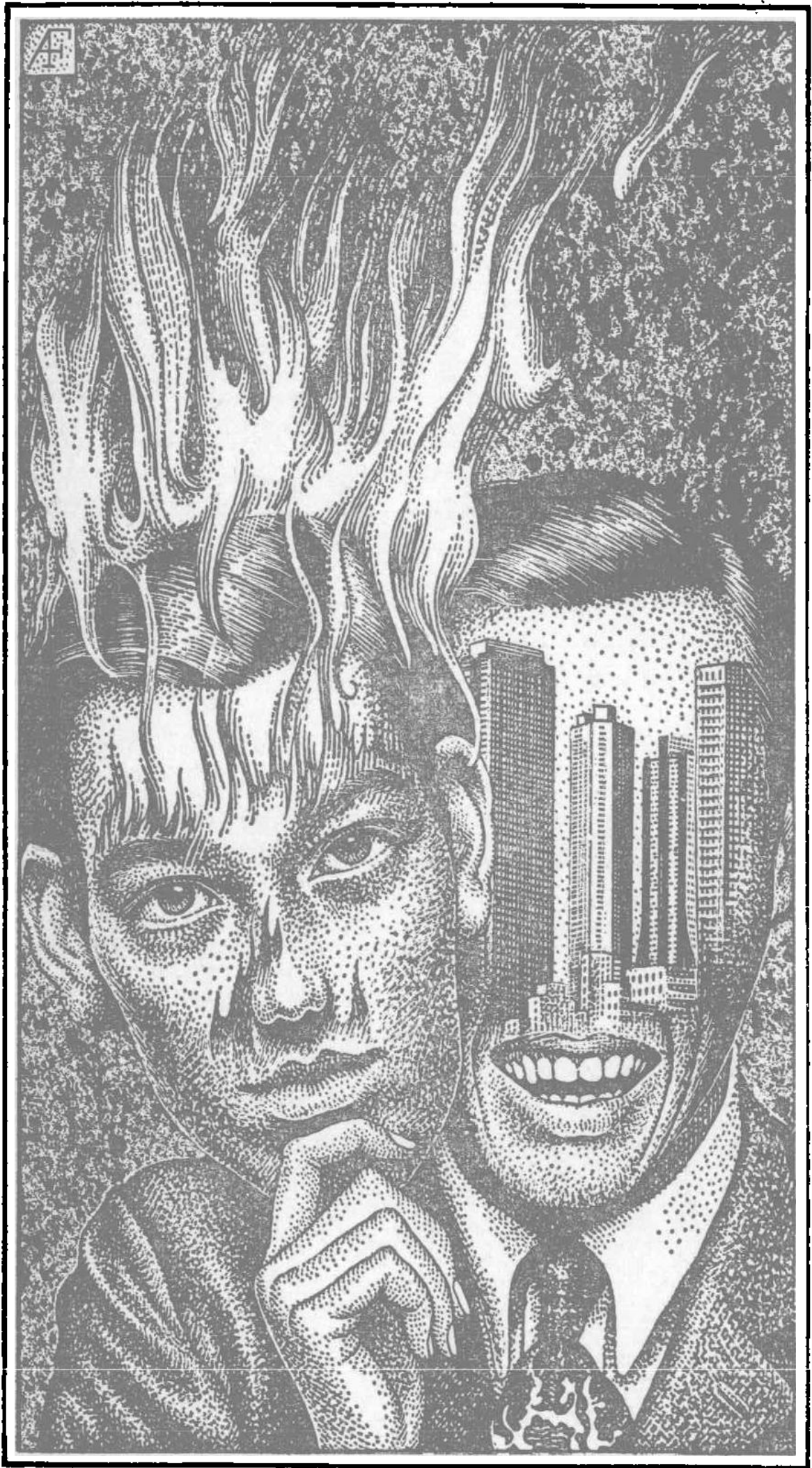
「いつも同じ人間とは限らないようですけど、寝相が似てますね、なんとなく」

「ほう、そうかな」

「あんまり卑屈な感じじゃないでしょう。たいてい道路のはしに、壁のほうへ顔を向けて横になってるけど、肘を枕に、背中を少し曲げて、膝をやや折って……僕らでもうたた寝をするとあんな恰好になりますね」

「そう言えば、わりと威張って寝てやがるな」

「威張って、と言うよりは、ふて寝風ですけど、それにしても、乞食や宿なしの寝かたとは違うみたいで」



15 都市の仮面